

短小包莖ふたなり女騎士と根暗な魔女

「はあああああああああああ！」

鋭く空気を切り裂く音が響き、一人の少女が剣を振るう。

彼女の持つ剣はまるで月光のような神秘的な光を放ち、その刃が触れた先から並み居る魔物達を両断していった。

陽光を受けて煌めく金色の長い髪。

誰もが目を奪われるほどに整った顔立ち。ツリ目がちな目は彼女の自他に対する厳しさを表しているかのよう。

翠色の瞳はまるで宝石のようで、その輝きに目を奪われるものは後を絶たない。

鎧を身にまとい戦場を掛ける彼女の名はセリア・バージル。ラグノル王国に仕える女騎士であり、同時に若くして騎士団長でもある。

「セリア様！」

「わかってている！ 怪我人は下がれ！ 奴等に捕まれば一生苗床にされてしまうぞ！ 戦えるものはわたしに付いてこい！」

セリアが声を上げると、周りの少女騎士達は一斉に動き出し、彼女の周囲を固める。統

制の取れた戦いを見せる彼女達は、全員が若く見た目麗しい少女達で構成されている。

そして戦場となっている森の中に蠢くのは、無数の蠢く肉の塊とでも呼ぶべき触手獣だ。触手獣達はラグノルの全ての少女達の敵であり、欲望のままに彼女達を捕らえ犯し、孕ませる悪魔だ。

セリア率いる騎士団は、触手獣達からラグノルの少女達を守るために日々、戦いに身を投じていた。

「セリア様、相手の動きに乱れが！」

既にセリアの周囲には十匹以上の触手獣が彼女の手によって両断されて地面に横たわっている。触手獣の生命力は強靱だが、身体の奥深くにある心臓部を破壊されれば再生することはない。

セリア以外の騎士達はそれぞれ隊列を組み、複数人がかりで敵を殲滅する。あるものは剣を振るい、またある者は魔法を唱える。そして万が一にでも捕まった仲間が彼等の巢へと持ち去られないように細心の注意を払っていた。

「一気に畳みかけるぞ！」

剣を掲げ、セリアが突撃し、彼女の勇敢な戦いぶりに魅せられた少女騎士達がその後続く。

それからしばらくの間追撃戦は続き、セリアは触手獣を合計で三十匹は仕留めることに成功した。今回の戦いで数えられた討伐数は凡そ五十匹。セリアはその半分以上を一人で倒すという活躍ぶりを見せつけていた。

「……よし。行方不明者はいないな？」

傍にいたセリアより年下の少女騎士に尋ねる。彼女はやや緊張した面持ちで答えた。

「はい。負傷者が数名、いずれも軽症です」

「そうか……よかった」

触手獣に攫われ、奴等の卵を産まされて廃人のようになった少女達を見てきたセリアは
一先ず安堵する。

「セリア様の戦いぶり、相変わらずお見事でした。流石は歴代最年少騎士団長……」

「あまり褒めるな、照れる。それより、死体の回収はどうなっている？」

「別動隊を手配しました。疲れている方も多いので」

「ああ、それがよさそうだな」

触手獣の死体は、様々な形で加工されて人々の生活の役に立つ。人間と奴等との関係は、ただ単に敵同士と言うわけではなかった。

本来ならばセリア達が回収していくのが一番手っ取り早いのだが、今回の戦いは数が多

かった。周りを見れば少女騎士達はかなり疲れている様子で、早く休ませてやりたいというのがセリアの本音でもある。

「よし、王国に帰還するぞ」

セリアの号令を受けて、少女達は帰還の道を辿る。彼女を先頭とした一団は、戦いの後だというのに決して乱れることのない隊列で王都へと帰っていった。

ラグノル王国は不思議な国であり、この国には少女しかいない。

では女同士でどうやって子を作って発展しているのかと言うと、彼女達の何割かは股間にペニスを持つふたなりとして生まれてくる。割合としてはふたなりの方が少しばかり少ないのだが、それほど数があるわけではない。

現在ラグノルを収める女王ラピスはふたなりではなく、普通の女性だ。見た目の年齢こそ十代前半だが、既に二十年以上はこの国を治めている。

「相変わらず見事な働きだな、そなたは」

謁見の間。

赤い絨毯が敷かれた豪華な部屋で、ラピスはセリアにそう言った。

彼女の周りには少女騎士達が控えている。彼女達は全員ふたなりであり、同時にラピスの愛人でもあった。

「わたしには勿体ないお言葉」

「謙遜するな。国中の者達がお前を尊敬し、愛していると言っても過言ではない。果たして余とどちらが人心を集めているのかな？」

「ラピス様。お戯れが過ぎます」

「ふふっ、冗談だ。とは言え、やはり女王としては数多の活躍をしてきた騎士団長には何らかの褒美を取らせる必要があるの。わかるな？」

「は、はい……」

傳いたまま、セリアが返事をする。

「定番でいえばやはり夜の相手だが、どうか？」

ふたなりは異常な性欲の強さを誇る。そしてそんな彼女達に合わせて、この国では性に対してはかなり大らかだった。性交は強く推進されており、特にそれらを生業とする者達には尊敬を集める職業でもある。

何よりも自分専用の愛妾を持つことは一つのステータスであり、当然女王であるラピス

はふたなりもそうでない少女も併せて百人以上は囲っている。

そしてセリアも流石に女王ほどではないが、騎士団長と言う立場ならば愛妾の何人かは所持していて然るべきなのだ。

「い、いえ、わたしは」

「なんだ、またか」

セリアが愛妾を断るのは、これが初めてではない。性に積極的なこの国において、事あるごとに愛妾を持つように勧められるのだが、セリアはそれらを全て断っていた。

「何のこだわりかは知らぬが、騎士団長が愛妾を持たないと部下達も委縮してしまうぞ。事実、騎士団の宿舎では夜な夜な団員達で慰めあっているという話ではないか」

「は、はい。わたしとしてはその、お金や愛情が許すならば好きにしたいとは言っているのですが」

セリアは何度もそう言っているのだが、彼女を尊敬している部下達からすればやはり敬愛する上官が所持していないのに自分だけ……と言う感情が勝っているのだろう。

「まあ、結果として我が国の騎士団は他にはない結束力が生まれているらしいのであまり煩は言えんがな」

そう言って、ラピスは小さく笑う。別段、そのことでセリアを責めるつもりもないとい

う意思表示だった。

「では今回も適当に褒美を送っておく。寄付するのも勝手だが、多少は自分の好きに使えよ」

「ありがたき幸せ……！」

大きく頭を下げる。

「下がってよいぞ。今後とも、その忠節をもって余に仕えよ」

今一度首を垂れてから、セリアは謁見の間を後にした。

セリアが宿舎に戻るころにはもうすっかり日が暮れていた。

彼女達が暮らす宿舎は役五十人程の少女騎士達が一緒に生活をしている。

強い性欲を持つふたなり達は当然、ちょっとした刺激や興奮ですぐに発情してしまう。なので任務中は特殊な魔法をかけて性欲を抑制するのだが、その魔法には欠点がある。

魔法が解けるとより強い性欲に襲われてしまうというものだ。一応団の規定では特別な任務がなければ、夕食の時間を境に解かれることになる。

もう既にその時間は過ぎ、団員達の性欲が暴走している時間帯だ。廊下に並んだ部屋のそこかしこから少女達の嬌声が響いてくる。

特に凄いのは大浴場で、毎日のように乱交会場と化していた。セリアがちょうどお風呂場の前を通りかかると、中から少女達の可憐でいやらしい声が次々と聞こえてくる。

「あああああああんっ♡ そこいっ、おちんちんさいこお♡」

「ひゃああっ♡ そんなところだめっ♡ だめえ♡」

「ほら、ほらあ♡ お口とおまんことお尻、全部埋まっちゃったねえ♡」

などと、彼女達の性欲は留まるところを知らない。

「セリア様」

ちょうど廊下の反対側から、戦場でも隣にいた少女騎士がやってくる。

「セリア様もこれからお風呂ですか？ よかったら一緒に……」

「ああ、いや。すまない。わたしはまだだ。これから夜の訓練があるのでな」

「え、でも今日は任務もあったのに」

「性分だな。それをしないと眠れないんだ」

「やっぱりセリア様は凄いですね……そうだ！ あたしもそれに一緒に……」

「い、いや、やめておいた方がいい。明日に疲れが残るといけないからな。騎士団長とし

て、団員達に無理をさせるわけにはいかんのだ」

「……そ、そうですか？」

少女騎士は残念そうにしていたが、上司であるセリアにそう言われてはそれ以上食い下がることはできない。

何より、彼女の視線はもう既に大浴場に向いていた。セリアと一緒にいたいというのも本音だろうが、特に激しい戦いが終わった今日だからこそ多くの少女達と一緒に楽しみたいという感情も嘘ではない。

「まあ、なんだ……楽しんできてくれ」

「はい！ あの、いつか……あたしともしましましょうね？ おまんこでもお尻でも、ちゃんと気持ちよくなれるように開発しておきますから」

少女騎士の言葉に、セリアは曖昧に微笑み返す。

彼女が大浴場に消えていったのを見送ってから、セリアは訓練場へと向かっていった。

「そろそろいいか」

誰もいない訓練場で、先ほどから一人戦闘訓練を行っていたセリアは、時計を見てそう
呟く。

訓練用の木剣を片付けると、魔法の力で点灯している明かりを消して、宿舎へと戻って
いく。

既に時刻も遅いということもあって、宿舎の中はすっかり消灯されており、物静かだっ
た。耳を澄ませばその辺りの部屋からは少女達の嬌声が聞こえてくるが、それもいつもの
ことだった。

大浴場の前に立つ。ここの消灯は毎回セリアが引き受けているので、明かりは付けっぱ
なしになっている。

恐る恐る中に入ると、脱衣所には誰もいない。服を脱ぐ前に浴場の方を覗いてみても、人
の姿はなかった。

「よし」

セリアは手早く服を抜いて、籠に収めていく。

身体を流れる金色の髪、程よい大きさに実った形の良い胸、鍛えられているにも関わら
ず少女としての細さを残したシルエット。太ももは少しばかり肉付きがよく、丸みを帯び
たお尻は密かに多くの少女達の注目の的になっている。

そして股間にある無毛の割れ目と、そのすぐ近くに生えているおちんちん。

「……はあ」

下着を降ろして現れたそれを見て、セリアは溜息をついてしまう。

ぷっくりと膨らんだ柔らかそうな玉袋の上にある彼女のおちんちんのサイズは非常に小さく、親指程度しかない。完全に勃起したとしても、硬くなるぐらいで大きさに変化はあまり見られない。

しかもそれだけではなくすっぽりと皮を被っていて、先端が隠れている。一応勃起すれば多少は剥けるが、それでも先っぽがちよつと顔を出す程度でしかない。

そう。国中から憧れを集める誇り高き女騎士セリアは、短小包茎でおまけに早漏でもあった。

「……解除」

性欲抑制の魔法を解除すると、一気におちんちんに熱が集まってくる。

「ん、くう……♡ もうちよつと、我慢……♡」

びくびくと小さな陰茎が震え、一生懸命に勃起をする。

睾丸が膨れ上がり、妨害されていた腹いせと言わんばかりに大量に精子を生産し始めているのがわかった。

下着を脱いで裸になると、セリアは大浴場へと続く扉を開ける。

石造りの浴場は、一度に数十人が入れるほどに大きい。幾つかの風呂に分かれていて、一番広いところはゆっくりりしたい人達が入り、それよりも狭い浴槽でエッチをするという暗黙の了解が出来上がっている。

「……まったく、相変わらず汚して……♡」

魔法によって生み出されるお湯が絶えず供給されることで床を流してはいるものの、それでも流れきれないほどの大量の白濁した液体が風呂場には溜まっていた。

それらが発する少女達特有の甘い香りによって、セリアの身体が先ほどよりもより熱くなってくる。

まずは桶にお湯を掬い、身体を軽く流す。

備え付けの椅子に座り、まずは石鹸で上半身を洗っていく。

彼女が動くたびにぷるぷると揺れる胸やお尻は、本来ならば誰もが目を奪われるようないやらしい姿なのだが、残念なことに彼女は一人だ。

上を洗い、次は下半身。

最後に自分のおちんちんに触れる。

「ん、あ♡」

性欲が溜まっているのもあって、指で触れるだけでも感じてしまっている。

「くぅ……♡」

親指と人差し指で摘まむようにしながら、刺激が少ないようにゆっくりと皮を剥いていく。

「ん……♡ はぁ♡ いっ♡」

ずるっと皮を下におろすと、可愛らしいピンク色の亀頭が外気に触れる。

先端からは先走り汁がまるで涎のようにだらだらと垂れて、すぐにでも射精したくて仕方がないことは誰の目にも明らかだった。

「あ、ひっ♡ いっ♡」

石鹸をつけた手で丁寧に洗っていく。

その刺激ですら今のセリアにとっては耐えられるものではなく、むしろ我慢できずに亀頭の辺りを自分から愛撫することで先端からびゅっぴゅっつと精液が飛び出していく。

一応、彼女の名誉のために説明しておくのならば、普段からここまで早漏なわけでは無い。任務終了後の性欲抑制魔法の副作用によって、いつもよりも敏感になっているだけなのだ。

もっとも、普段ですらオナニーを始めてから射精するまでに一分と掛からない程度には

早漏ではあるのだが。

「ふーっ♡」

何度かの射精を終え、ようやくおちんちんを洗い終える。

既に彼女の目の前の床には白い水たまりができており、そこからは少女達の発する甘い香りが漂ってくる。

適当にそれをお湯で流してから、セリアは狭い方の湯船に向かっていく。

四角く縁どられたその湯舟は、それほど広くはない。と言っても、当然普通の家庭の風呂に比べれば充分大きく、一度に十人ぐらいなら余裕で入れるぐらいだった。

そこに貯められたお湯は白く濁っており、先ほどセリアが出した精液と同じような匂いが漂ってきている。

この湯舟は主にエッチをするために使われており、無限の性欲を持ち大量に射精するふたなり少女達が射精しまくった結果、このぐらいの時間帯には半分ぐらいが精子になった白く濁ったお湯になってしまっているのだった。

セリアは躊躇いなく、そのお湯に足を入れる。

大量の精液が混じったその風呂はまるで粘液風呂のようで、全身にまとわりつくような粘度があった。

「……ふう」

全身を心地よい熱と、いやらしい香りが包む。

どろりとしたザーメン風呂に入っているだけで、セリアはまるで自分が大勢の団員達に犯されているような、そんな錯覚を覚えていた。

「ん、く♡」

湯船の中央に移動して、膝を立てた体制になって腰を動かす。

すると濃厚な粘液と化したお風呂は、ドロツとセリアの全身に絡みついて刺激を与えてきた。

身体を震わせればザーメン風呂は乳首やおまんこ、そして当然最も敏感なおちんちんに柔らかくも確かな快感をもたらす。

「は、やぁ♡ んっ、く♡♡」

全身を包み込まれる快感の中で、セリアは妄想する。

自分が短小包茎であることがばれて、団員達にからかわれる姿を。

何度か盗み見たが、騎士団の中にセリアよりもおちんちんが小さい少女はいない。

妄想の中でセリアは、普段は命令を下す立場の彼女達に短小をからかわれ、責められ続ける。

「ふわぁ……♡」

ふたなりの少女達が、セリアのそれよりも二倍以上大きなおちんちんを、左右からぐいぐいと突きつけてくる。

セリアの短小おちんちんは一生懸命勃起してそれに抵抗するが、すぐに先端を抑え込まれてぐりぐりと亀頭同士を無理矢理擦りあわされる。

「ん、あぁっ♡ ふう……♡ ふぁあぁっ♡ ひいんっ♡」

妄想の中でセリアは、三本のおちんちんによる責めを受けていた。

左右から一本ずつ、そして正面からも。

逃げ場なくおちんちん同士で擦られ、そのままセリアは何も抵抗できずに先端で突き回されるされるがままになっていた。

「やめっ……♡ やめろお……♡ わたしは、団長だぞ……♡ ん、はぁ♡ それを、こな♡」

お湯の中で腰をゆっくりと前後に往復される。

彼女達の精液が混じった粘液のようなお湯は、そうしているだけで射精するのに十分な快感を、セリアのおちんちんに与えてくれていた。

「あ、あぁっ……♡ イクっ、イクイクっ……♡」

囁くようにそう言いながら、皮を被ったセリアのおちんちんの先端からぴゅっぴゅっと精液が発射される。

「んんんっ♡ ふう……♡ んああっ♡」

ぶるるっ、と身体を震わせ快感を受け止めるセリア。

数秒間の射精を経て、一度全身から抜けて湯船に深く腰を下ろした。

「……ふう」

白濁した液体は、すぐにお湯に交じって消えていく。

そのまま少し休憩して、セリアは一度湯船から出る。

彼女の夜はまだ終わらない。おちんちんこそ小さいものの、やはりふたなりとして絶大な精力を誇っていた。

結局その日は、お風呂でのぼせるまでの間に十二回も射精してしまった。